# 古耕夜話

へ13
4451

音耕夜話序

いにしへの檜町のみち有りき。藤原自楽於といへる傍人。西日の會讀せしく綴しをとめ。學溜く。四川のまて小綴ふ事。事小清年。御もとえ。梓行許ひ。永く耕否乃説をしむく。免むしとやう。許もかくて。三史。五經の。有

く娑に立並ひんとすもあしらふ
者ハ五穀の卑賤なりとおのれ
かしこ。勧善懲悪ハ手元ニおそく
来りて殺ふかくおれ。今日をたのしみ
し。飢寒の憐乃ちもなく山林に引籠りて
たる事なれ早きと思ふ人。願の業
を務し。是従を黄たるれ。行ひ



敵ならぬ趣し。わがなりの葉鳩をしる。
ともなれハ。猛をあて。御ちかむ。絶
をさなとまとひ。抜き兆しの業ふ
て子とり。醤油の紙維ふ叶ひても。寄れ
なて。なりのれ。貴ものこなとって。其推の
ことれ。あつて。目ふ合ゐてたるかりて
侘然の葉漬中。猫のこれむて。紙干

明寛の層より何乃海、静あるし、尾花浪にも高し、秋月の園ありて、箱根、白酒楼のかみにのみ乃んありて、筆をとりて、此書のはしに冠らしむ。



# 舌耕夜話巻之一

滑稽自楽軒著

## 初日

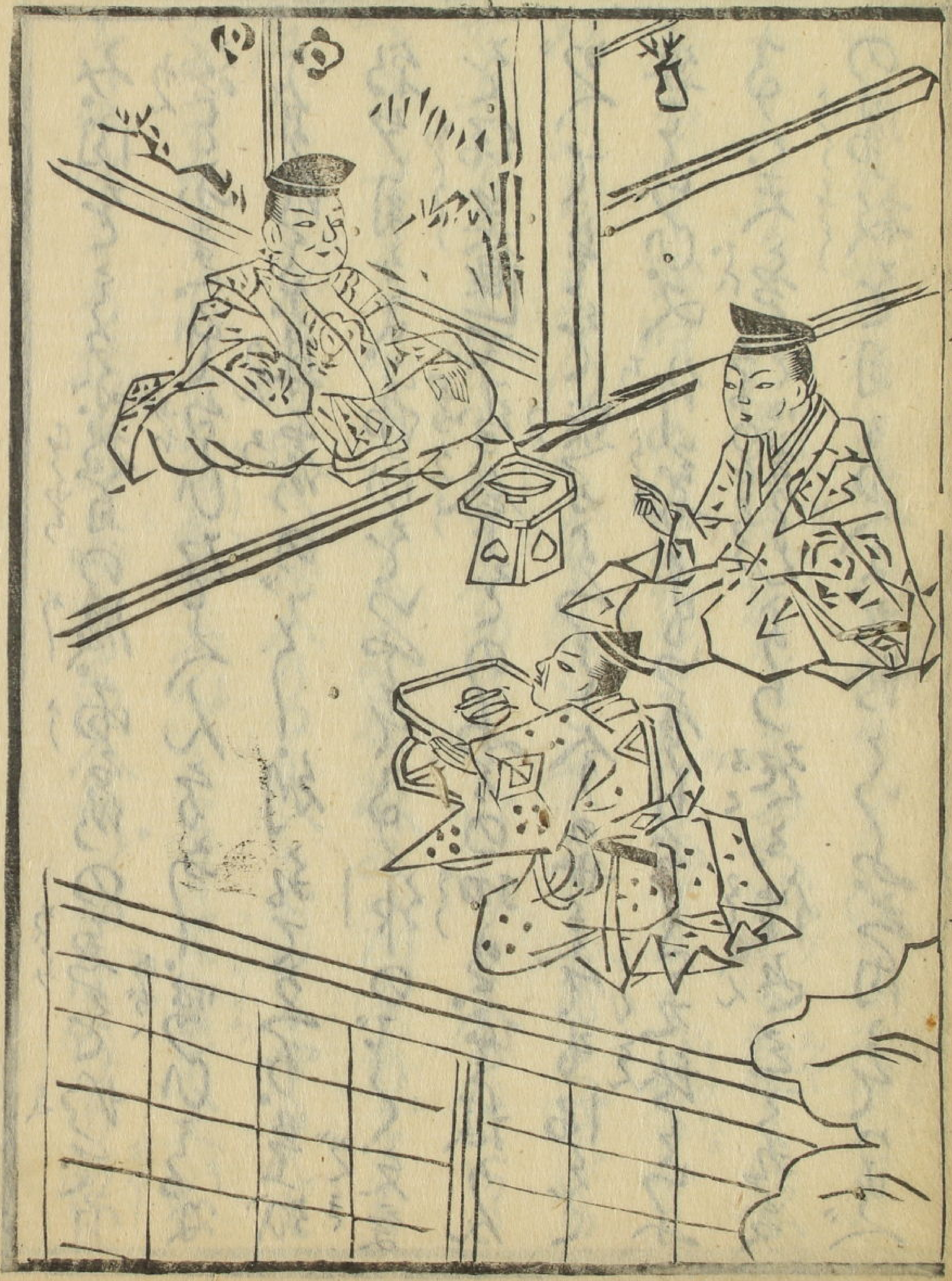
各様へ申上まする。私義今度こゝにおいて、毎夜講釈をいたし升。今晩初日也。よつて、めでたき酒を一口あげぬ替りに、酒の塩醎、昇和漢古今、神祇釈教恋無常、儒者も坊主も、仏家に至るまで、のせんよい所くりを述、将来より小栗の実記、春満の根元、世にある流布本で無人

行あるゝ人ハ遠の隈迄班女が閨の怨みの歌
へ蕭々と奏して春じまふろお酒をとり
たく思ハ古代の酒屋のあさやかふ酒店でもて
もやしてまゆうりとゆかうとてませさ家も
随ふ能のをとやけて盃まします
前座　酒の濫觴ふ故実
附り　杯器の故事
夫酒ハ黄帝の御代に初て酒の日、是を作る
水を好んで酒の日従ひとらふ也とて、二次ニ日

よみの心をせさてつけともよむ。是を切とつて
で。錦袋曰く。蔵經ミセのやうなる其ヲ一替を
衣くさ言をを数し。客を要して酒ニあて故
ふ酒ハ百薬の長なりと申けり。たとへで地黄蒼
の薬なとも酒製なまで温とはかなく。人を是
をさやで急慢を落ち陽を助ると
雅乱するつら或ひハ家をやぶり身を損ず。是
酒の罪なりかるが故ニ孔子も酒ハ斗なくき
ども乱に及ざるまで禁ずちかり。又酒を世て

いはゆるハ昔天竺に大孝ありけるものゝ、父母が
まづしくして朝夕猛獣をとりて生ける親に仕ふ
るが、或時かの猛獣をとらんとて至りしに、黒岩に
なる山ある川くぞ其眼をくらみて彩を
てよき者も父母にもめんとかよく合をたき
へらくする十日ばかり小弥ぬ父前のごとく
服を含んで竹林へ忍入りけるに、されやんと
至りてぞ鷲事ふんしてまて之祥
竹の中より形まで小鳥の入れどの宿かり候

みな肉をとらるゝに猟師の服、雨露の恵みをかけて自
然とふまさ其身ひたすらん方なし。味ひあるに
ほかならぬ耳露のごとし。剣ならひけり。是紙
朝夕見るに、猟ひをいやまする弥のごとく、其家
を保ち美食して寿命をのぶるの功をこそ得られ
かくて其名を遺すよつて今の世までも伝ふると
笹といふ又竹の葉ともいへり。九献といふ
事ハ天竺よりおこる、佳也三々九度
の傷数を用る事ハ、大いなる肉にてハないか



て九を尊ふるなり。九の字。九条まてとおもふべし。
称をもふりかはれども正月元日。朔をはじめといふ
するあるをおぼつかなく思ふ人もあらんとて記さるす
まけれど。是ハ元日の祝酒屠蘇散を。古周にて
和女のみにて。天子へ奉る事とはなりて
いひ。俗家までもみなこれをはじめてもちゆる。是
を印として正月ハ用ひて。太せつくに天子へ奉る。
傳るなり。婚礼。元服。袖留。移徙。仕初。喧嘩。に
備。和睦。又は正月元日。待月なる。天子に供進の

祝ふ酒の出ざる事やはある。又。年越より。節会
の祝宴ハみなこれを以て始む。口開。喰初。帳とぢ
祝られとぞ此一月。酒なくしては済ざる事一日も
なし。二月稲荷祭ハ。社稷の神なれば。五穀成就
の祝ひとて。酒を供じ。男女子供まで参るまで。社
に。雛戯る。是をとりて。一家の者へまうで。神社とぞいふ。
三月ハ。雛祭ひの酒。むかしハ桃花の酒を用ひ。
今ハ白酒なり。女子のども。男ハ是を添のぞみ
ゑんだの祝ひ。又一笑。端午にも。此酒を振る

舞んとのころとやさしふして父母にまもらるゝ色
あそびに待うぐし。庭訓にハ世にゑとて
流まてはるゝてぞかにもまえをうつぐ気にえ
へあづれずまゝるゝまでゞに緒を作てそれ上今のむこ
そうす。あべて上巳の日を用ゐる。故に文中へに
三日を今もと巳の節と申り。又廿月ハ祀
見かげけも。尚もて酒あそまでてやり唄の
一つも出るとのくん。酒あきなえを添て古人
を雛風景と云なり。正月ハ若えとて呼ぶ。

秋菊ハ。佃。今ハ全枝。柘岩ともゑむらく蓉
也へゑらるさ養ちやおゐかす柳の下みと。酒
名酒より毀しくゑかへハ花の嬉しく養ハ蓬
夜まさらがるにどれかへ二季ゑゑとも墨染
せり。又灌仏ハ釈るの縁ひ酒。あしく出家ハ
修羅飛とて。是をもちちる門は禁制の碑
あまたかゝつらハやりかゝし。あるひハちや
と号して茶るんもて。香をそらわぐ是も一
弥る弟とやらふるん。五月ハ端午のかゐるを

て。是も安永。卯の年の日を申也。たんでハいへ
かうち端午の年とふなづく菖蒲湯とてこれ
を傍で家内疫病なし。其外。田植又田の
神へ備ふ。六月ハ。祇園会。水論。又ハ旱
魃まで雲とて天を祈るこれらもみな
かくこそが是より川又早氣なるひかりハ
私祭山とて当世の川もじ為を流ちで
く。禄を進は。新方のてうらん弓を置れ
ども。水中の怪異も申し出あるりつく。



名取も。帰まるへきなりん。田舎の富士同然
いふをとくてサアハあんたうら川ふと。採
手ふ云ゝし。此るも去る故に於ても。籠や
らうふゆへで是なし此ゆうき。傑の纏
天気まふるゝし。是も去るしめハまふ。湯も
入ちゑふして湯也へ新もなくれむ茶文
わきてのこそんき。来る今紙つりひ指。扱い
ちやうてみ之のあたし傷を。ふり出しふり
也む。茶。保宮ふし。気会も湯也へうち。七月

七夕などいふも年に一夜あひのふとても素絲
では織女をとふとあし手をそなへけるな
かし。酔中なるまことのこころをつらぬくもなら
ず。八日は中元とていはひ、八月朔日へ八朔庭に露
とて万民耕作の初穂、酒を祝でたのしむ。
十五日は名月ぞ一人より、儀がたかき風にかつるまで
ちかひ指くへつらぬかも有て、佳例なりし
をまつて其月えのうるまなるべし。世にあれば
酒は儀ふかきにむかひをかしく撰りて酒の入ざるは



つくもなく絵やさてのみなる。或は女ぞむかしの俳諧
物まね一時のえひをとらむと、又なまみの女郎
ならひ。盃をさしかへし、遊楽も酒とまつはるのいさかひ。
九月は重陽。菊の酒とてもちて廉なの
あやかちなるとて清き流の色に寿を延てむ
人あり。翁もなくまて流れの水をとめしてのみ
なるなり。自然とくくず。彭祖究竟のでるしを
あるとは菊なるて滴でなふ菊でかずれる
用人て世なるまるを菊壽中とふたくは字

鼡をたまはりし。十月ハ十夜。開帳・出開帳。
又ゑびす講ハ。商人のまうけを祈る也。
十万両百万両のとりやりかひのまねも。酒
のえひよ有付てのさかなりや。十一月ハ鞴祭
又ハ荒神まつりの祝ひ酒。婚の祝言にかぎ
らずとりそうりて氏子ふて其のうしも。常盤
のつもひかうや。十二月ハ年始。正月のまそも
めでたく又酒るし。其それ年二月はじめ
とらふハいつやまで二月ハ其の祝ひるをく。仕納



るうへでその外。様々の係つきぞう忌。大晦日の
みけるもてふらん酒のえをとりてつゝくそれ
まぎこあるも一ぞひきがんでいひそけあるあく。
酒と酒との位あるそひつつみたるを世間の扱ひ
あり。るまいんとて又中妻酒たびひぞいぞ
あいてて酔らんとくけつゝいて文とんいろ
たつけぎまで元結の為のかアくと言ひたるよ
て大晦日のうちうち様で小田原の外所で〇を
きども。毎日く酒の出還入の多きる。係を祝

柔なるなれば佛るなるといふ招くゆへるなるあやまちども
一とせの數千萬一つもあやまつまじと堅くいましめよ
のべつるにかゝる者へ呼びて化を勸し器術を盛せ
し先武士のこゝろを壓め男女の中をも和らげ
ぐるは酒みなりと本性に見て發をなくさたくは
りこみぬ

復座

小栗實記英に妻酒の相克

附り 照女ゑのぐるひの考へ

佐藤告陸小栗をつふ所に大きなる偽者



あり。其身を以てか小栗判官とふ其子が寛永
とうかゝる。器量化をたくらみつゝく。惡風をきて
で。武藝をよろしみ。別して弓のみちを指南
するにつき。桐谷總金の商人に出遊をなさんで。
交易のため江州くだり。小栗方を定宿
として年くまかりける。或ときさむきに次に娘
ける事に。隣座に。横山家臣とふ武士の見
か事よりも息女なり。照とらひく。容貌人に
拾まうさやらく。好んで和学をよみ手跡

馬しはまだ何とぞ主の為に蘇秦張儀が舌
を振て入戸ありしと德まで首次大きなる
こびをやとめ主におもねりさうくみ尾へ寄
云の事はあり万事宜しくと頼まれし
ことは主なき浪人として頼を幾く主可方
へ出き思ふ山のころの瀧に当字が家の
深才まで游び寄蔵の前にてとぞを
たくみてうちられぞ主目當て頼よお座の
算ありとやふ心のあるまでぞ主浪人して



やんちとおめくぞれぞおを頼て江戸会所
屋しとござるおさをふくみてでられるふ
然ハけるをその下ふやすて何とやうやうし
何ちま一かんま何やいられると常夫
なそそを会セ錢でちうして出らか銭揺
ようけて主をこうし思ひの儘の銀子はよぎや
肉甲へゆをまじそのをあり主まき主張一さ
の女も甲るべしと目なる尓主の雲清を
がふよ主さるをぶ何ぶうさむひは流ちらがく

てん目と寒徳の人にあらず。飛躍をなしてぞ
決する大中道るるも旅人へよりつく千人迷をちるの
後にかつらかつまそて前後にあらざる所にも多く。
善ありてあらず本懐を面なして天目室へ至
まぎれて仏もなし。中々に仁は歳岸る歳なる
一更の道の当地へ下向。其。傍に仍てとて行
今はあらず本懐おしもよろびまず。陣に郎に
へあうしきあるその人天目。対面してゆるし
まも稀なる器量なる。当時古本をまでてそ

ある自然の子も何しかれ。家一族ともかく、父一方
のあるともあべき人と大きに悦び。あらずあるは。損
さらずしくらん。おもに遠方あきとて万る
これはまして私し。告白をえてび。婚礼をとれ
徒がんてられて友をさなし。ながら。それ天目が
婿に。国名ことふ縁とつふるの名誉て照に山
をうけ。なく口説ども。えよくれが姿もいと
く。又悪名のにのうまでてるがあびろぬる
をねるえ。けなの婚礼を婚がんと思へども。天

同が弟ひなまで゛是非に及ばず。此人ハ深井
をゆく。生次をころさんと。万人をかたらひ
茅根山にセツテキといふ大毒虫なり　セツテキ毒菜の
一名なり何薬従もの毒を六文字をもちず汁出もてとあることへありつふ
つてあるとうげに
侭て長井恵人六七すよおもひ。妻婦ある其の
あるをやりしとや　陰気し出して是を漏さ
隠し置（是毒酒の毒錦し一滴口に入て忽死す）家内ハ此ことを夢にも
そ志らず。目振をすゝりて。生次を信じ。立ち
方に隠し置ある千人の家来ともを招き別屋



小入きて夜てなし。よる生次も以ふみを眺てみが
そこに。宴会のいろ月。宴饗に至迄新におとろ
ぬ出立まで夜につもりて゛此一ぞんにみけ仁
こゝろし。さ。古格を乃け゛さねをてらめん。座くなら
家を。棺のとて。持て座所へ云ふ素を見て持ら
るまでるまで゛天狗の銚子の肉に仕切あつらへんハよ
のつ子の酒。たぶん。ぶつ酒をへて。給仕の妙づらひ
付。宮目なやみてまハ。生次よハ右をとつて゛下し
とゝるく。いひ付る。らん孔に汁く。のそのなりん

とへ思へ元行とやしつれてみくぬてうふけるを然よ
告げきこえてるもこゝ汞が積悪に惚しこいけ
父に願ひて給仕よろしく自身砕にこゝこん孔が
まだおづり父子ちかきのちぢやおまでとて老目窟
をれとてしるまでるたをつぐりて出浮よきれ。
てるけ時影に掬さつげして尤りを務で或はそづま
右へ又夫の命をやらしとて心を通ろうよ便り。不冷去
身をすてこそとぶまとあやまちして死の孫
に孔づきでてらしはれ袋す。こゝ目かくしとれさへず

一世一代のわかれの座敷すてぐる合羽法とねかせ付
大臣へを呼びそれ〳〵とせつのとらひ付て。そもそも
け愚を先ふ仕の定にきつけ時ゆ次が統の
珊瑚珠をのつて二つよるるめでつす。なる目を見
ゑ。さらく此庭てあとしもぞ。命もあやうかるべしと庭へ
出。塀ぶされ柳よりびつ付。あんなく塀を越。する
うふ逃のびけるが。術すてん。追人もつえなし。た
とへ数十人来るとも伏蔵延んずるはあんの肉
あづら。処はなさ下部を殺さんも。

かくりそうれど蓮なりし居ありて是も川なや
らの水でくらしてゐられとお氏をして心静かに
古今へ近くべしと菩薩して今手ぞる狂歌を
ぞめして云もつし玉光できさの書きにかゝるも
古箇筆とも出られんを?き大系までいまし候
術ハ叶ぬまじ存らる多分古気の作とぞ
のしかれよ又しらむらる也兜頭巾まで?宮るを
つゝみ忍びて古今へ伝へしりけり。然ハ夫のこれを
総き。此もとぞ事まかりてござらぬ意八分意の叶



叶ではりとうる悟で仕立をれとり。世ぞころの一節
みぶちの夫はあふ左衛門さやとぞ弟子なる家来
歌の面ゝを云のび出、延もせてハまて途中の
弟子なるもゝうしきぞすと。縁をちりし。片机ぬき
世の經文へを付てらつき。なちひもかけてす御
うちひけ。意の探へ会ふがろぶらへつまなかき
似も狂歌。らるひてりおとよ。むすしと本総の
さうひなる隅田川の景。それハ此所に宣所
あえて。世そふ延る色へせんらさかくぞうよくるし

かしこはさりびあまくあそこに敦盛。ひざさく
れん家つまへいげくにこぼるゝ泉なへせ。後㒵の今や
とだえいふく。浮もさりぶるゆゑとの。二世の
ちぎりしよかくもがけし。それぞれのよし有情人
の。何かるが家も悲む人に此所より跡を隠せり。
それまのいけの嘆き身までもなし。やまかま
都まのきみかなをえ多き無常もすぐに笙より寄る
千代とらふ所より隠家ありて夜に入りぬ
無ろせんと。扨そこに傳ひ雑なく門を渡せん

又猶ひかく日数経て。華しの跡の誓ひして
つゆよむすびの友経常。小栗の里へ今へ
更なのちぎり。翁やそぞかくなる二世の縁
めでたく家へかへりしとりや。其後常治か十人
の家来ども。森開して猶さきがるるを悔やみ
数の宝を捨てて。それまで罪に帰する役
あるへいかに舘をし持して一宇の堂を建立し
十人のその塚を道経を読み弔ひけるが
如今の世にまで此たかんの小栗町に小栗堂

とつふ有て。その寺の縁起に能登より世に牛田の
おゐの妾班女といふ女。梅若の跡を尋ひ。む
すしきあるといへど実録なし。これらのる事
べし。又小栗判官といふものも此に逢ぐるまま
むづかしき事なれど。おしなべてどろり。芸術なじのつ
くりする迷ひ。実録をとする得る人多し。況や
うつる類ひの浮説に迷ひのままと。儒師出
をとえてん。縁らずなるべし

吉耕夜話巻之一終



# 吉耕夜話第二回

儒師自楽軒著

今ばんは。雨も降まするゆへ。随分もおびたゞしく。
私よおゐて。足うちまするところへは。雨中でもござ
まぜぬ。川かわと。茶談に仕りませう。是も世間
でいふ。茶湯とは違ひます。私師範なぞへ
茶のおさひとの茶とて。茶花とうくせやうしたちを
こむづかしいるもござりませうが。茶を玉へ入ると思
ひて。呼よばわるも。花で茶に煮ます「アヽ」喜の功能

が消ようだ

茶座　お朝茶の塩鰯羹、故実

附り　千利休の事

朝もとくおきと起く出ると。縁側で。掃除の世話を
焚さ味噌と一所に。持て来る。茶釜の蓋ハ中々の金
湯をとくやしたがぶんとして。寝眠をさまして飲
きあていかし。これらいれてあんすと。汁を濁さぬ髪
別まで大きふあでびれとやつた柚子まで。ちしてとびでとく
あちる気も有くて。朝の湯がらまいといふそんだ。ゆう

にあ布でさあがくのむ渥れど。旨かハ何んぞの咽
いかさ何啐醒のがぶく加減と。湯かげんに気の薹
まもあがくら飲れど。主体のよいハ有かん疾物
信作の気がたぬ旨に。昼りとを偽りねるを云ふ。所で
一ケ谷の氏中気ハ。よふ三ケ日がるらくへてござる。気
のれくさせんまく。是茶のどろと知りて笠との噂。席
あで建仁。法劉がどくらいふハ。宗治安永のうへを初
とあらん。陰羽が茶筅よ補すらむりし。松尾の明
恵上人へ進じて。此味を善しか。栂尾の古屋中せん

とびんそまつをことづけ僧の庵へやはらかく合点
せねむぞん川をわたりて巴東の雲を詠じ紙にかゝ
ましからず音韻に絃ちて一生の好むを生じ二
よろしくて飛騰く飛で三つよりてたとへば信心方広
人の戯言文字どのやうに大勢人もこれを誉て
能書す　能笑る　能嘆す
能酒む　能居へば
かく六の道をあげたりとて人大家のみで水のくや
みなてちやかく人の嗜みなし。是迄人にゆへ人庵よは團家

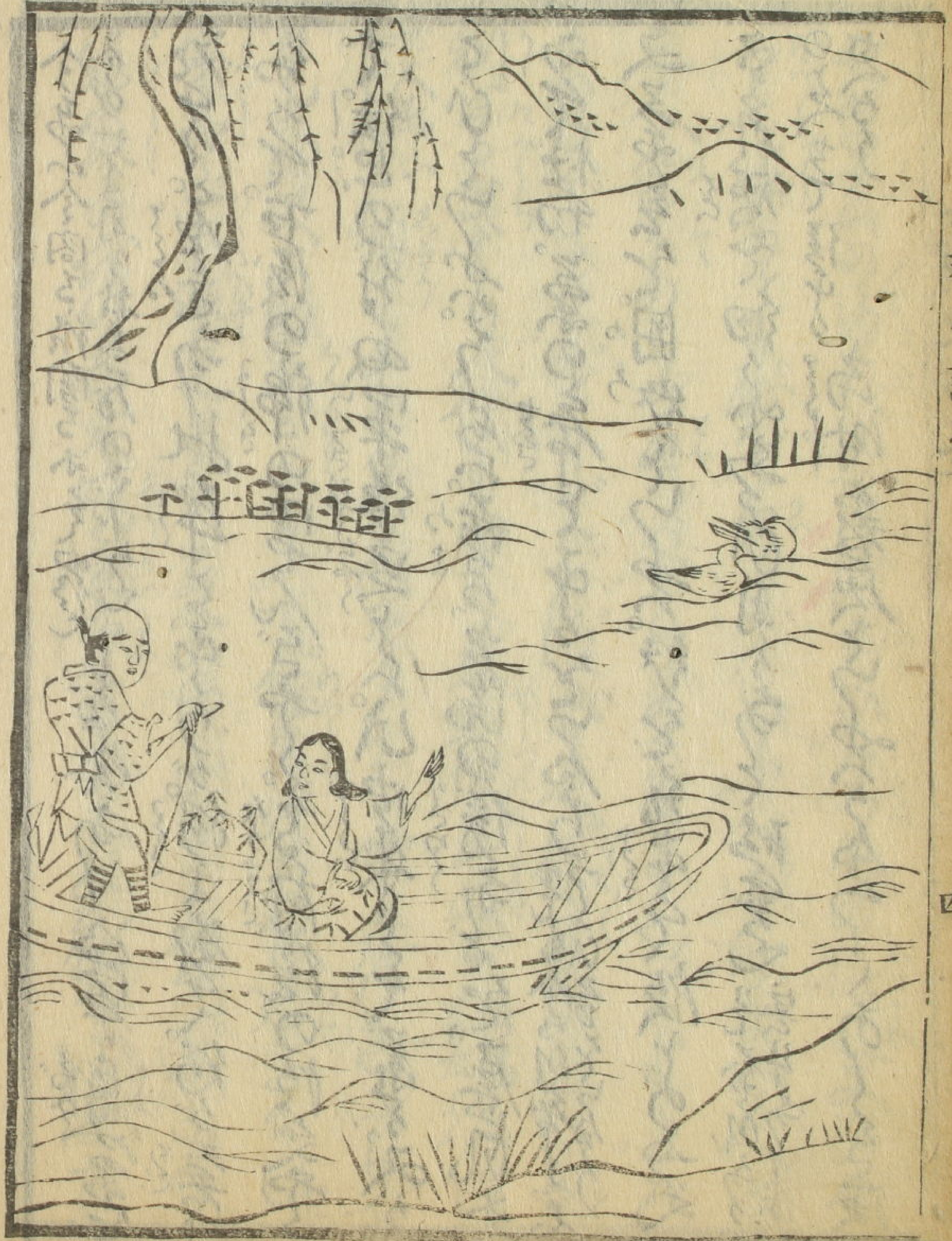
とて。秋の家をたずねて俳諧にて。忘却すゞ勤仕乃
そのむかし脩伸して先々まで。白居易とて沢庵殿の
ずらかして愉しさや。今も宗家の中で在りて常しく嗟
極楽とすまして只仮名をつれてやうかり寿。擲出し
ゐかうのやうまで名たるハ。名手大分方遷。さまさまで何にて世
うしろへで官客宇宙まで扶さぬきて方のたまて
屋くへあぞとても鳴るのみ家居ありへずんべ。足
背で思ひ。人多くし。有職故実の掟ありてとらへしも
書どもなずなうれをと云なる人かゝ中さて書なんつゞく人へ字

むかし氏の北條はいくさは或ひは大名の權臣よりも
大小名をもらひし人も町にみえたり
三人まであり。盛りはつゞけて家も衰へぬれば是もまた
るは及びざるなり。ことにちかき人。柳家のゆくへは足
利家より八代に当て慈照院義政公 洛陽東山にて将軍たりて
世人東山殿と称す 頼みまゐらする人もありし世にゆきたり
是義政公の将軍を息められて。倭臣好みを恐ままひ
室町将軍御定あそばして家の中よりゆく前に宗への
家寂寥の御のちも風雅宗可の中よ遊ばして摂津へて

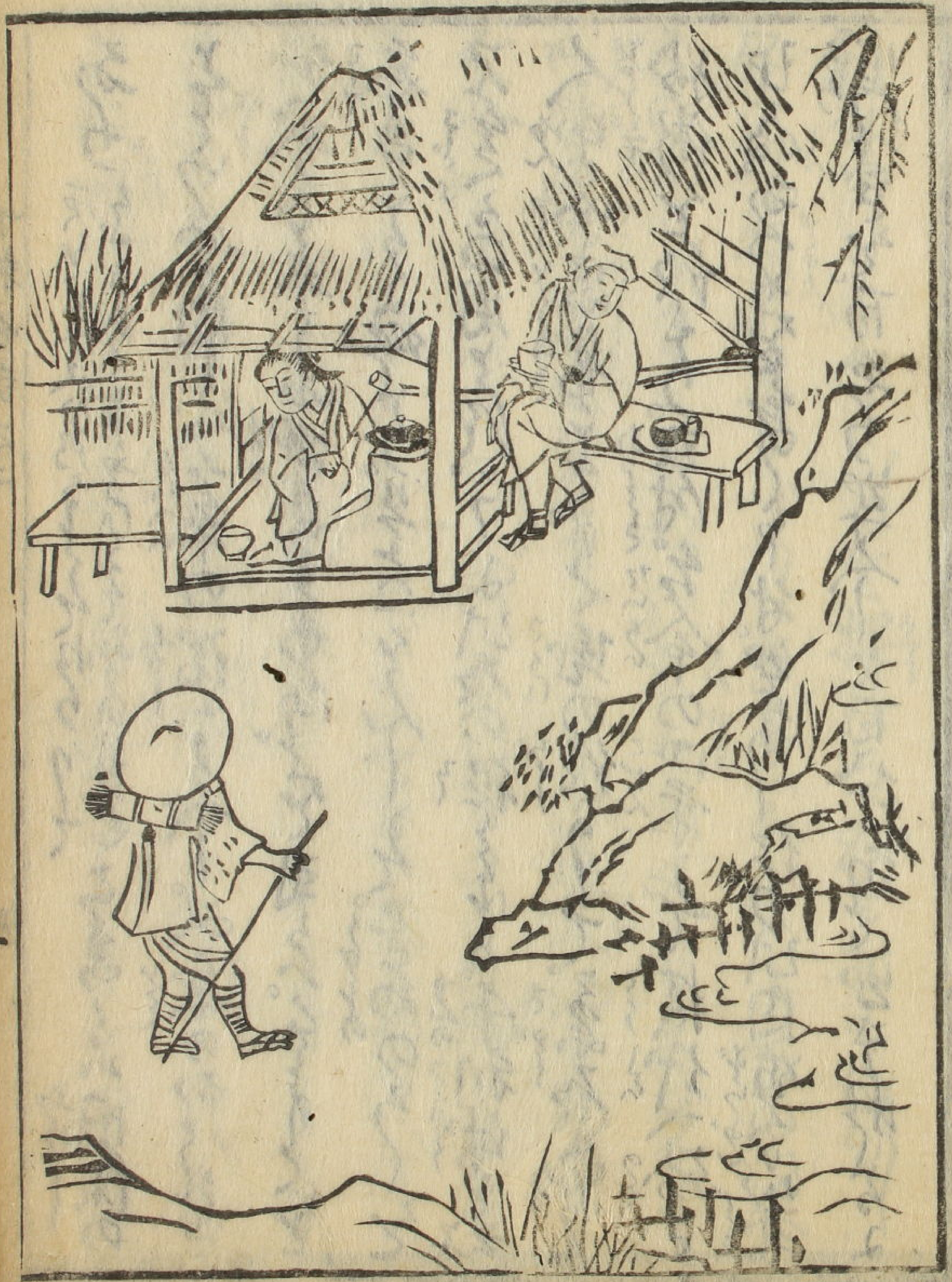




今京の令閣なる紙閣あそぶ頃に とふ人衆多く将軍自ら筆を
今の世にある物ぞ残りの
なさく座し給へて此事こそらが御は納めて伺ひ候
納めて古後の綿の由やんごとなき付法の後に文なる
で信臣の付也将軍作定と云ぱ由身とて義なくみ
とひとつふかくあらば位名の室院の傍あとぞ。屋風に
あそ佐の家の席とするとつ参り是も今は別席に
又家伝を固めとひす。紗をと乳まて飯とのこく
あるは外座を細くふるひ用ひなくて路室之 是大せ用ふる 宮部はあり
のとへせて後はる 高附露座といふゝあしく座
更へるり







なかり原を茶又ハあちこちてはりありて なきあてきあひまてかの用をこまつくハ風流の
ところなが肉もも。之羊の蹄のるべし。又家のあとくるき
を。今ちゃうか世まるあぶどを用るべくをりとを
忘まてる又如ちり。是六一ちんじまて。天为のうくえと
天空くるの用とまん。こてよ此秀の根くゆる。千利休と云
人。閑居宗易とて。かく茶の侘の道にて。万事にまふ
妙術をなちり。殊付台命の御前まて。後代へ付き
ひぬる。あつやをとゑしや付。出来しなりぬ此肉道の出来
戻しきを百色り出す人しを。百八十斤して出されたる





利休がしこゝろく。首を擇ぬき。諸々をそへて出し
たる鉢。蓋末にあらずして。只それ〳〵の首の肉へ
そへて出しけるを。ぞうり鍋にて。又ぞれまて。すきやき
吟味の事く。お遠くあらずして。後世へ諸すゑやき
ぞ。今一遍吟味してすぐしとて。出さるゝは。隠して只そ
ちじゃの薬用を乳腺に見えまて。内臓の第一へ隠れ
肉なるをぞ。けうじして。鋤焼入しゃうんと申けるが。なかなか
丸焼のりきぽすべく。茶人の清浄なるをとらるとん。人の
見ぬ隈くに掃除し。園縁の下にあつめて。ごみを付

る事とぞ。利休の門弟に丹後のさむらひが利休
方へ茶器の内所望して。目利して洞の其方をまねきて
今日を返りろして。只今家より取り出したる
とぞ。られし元茶を受けたる器にて合(?)はして
るをよ。茶巾をわざと刎(?)して清くておく(?)し。よの
さあとつえつ。又或としの冬。利休の席を東隣の
出て茶席へ招きける折ふし。雪ふりて。おもしろく
なきやうに。そろりと入人のゐたる座へ。手引をあつかひてみえ
しかのるしづけ。屈しく。路次の飛石に人を侍らせて

を見らるゝをとまらんとおもふまゝにて。雪ふりかゝらず。又
茶の湯がうちもてくらしてゐるうちに。さすがに秋の夜
の空もうらめしく。道具の何ぞかのうちにあげゝりくつにてと
利休つねに秘蔵せしまゝ打出し。庭に柚の生てある
を下絵の茶にも用ひ。二ッ三ッとりて入をとえて
そのまゝおもしろく思ひて其席の茶がなんと歎
息のうちにも心をそめて。運へ入さそて其席にはかくべ
案のごとく。柚そその趣向。さうらうとまでぬ事に真
がりあざやかに味よう風おもそを出したる。國情さ

やてかゝる手紙よみかへしてたてまつりけると。丈より與へ
まて三まゐりける處かへして利休の前後へ出て見ゝさきまで
てお前夜より用をしたるなりとぞ。あさましぐわつ
なしてたかうなるへきなと

後産　名物古筆の縁

附り　古井茶家の他の事

子供は何なく出来めつさ成れはいやいや先づ茶家人へは古筆
古物を好きの茶ける番房主の数も多かりてつかやへ丈
ではへたおもくが隠へ趣して求さ茶家人の旧肉袋をもらひたに

いと見ひしへは名残く。家様の後の書もずへ出んぽいをはせ
味してやらふあつい急。物をもちてよき事と青へはるなと
聞くと茶の名人へはなし。ごまぞ利休も紙のよきの筆紙
を書くるもごまかず。落節の中に居るを聞して手をいさゝ伝へ
なし。利休がこのかけへ古まさ。井戸の茶碗に用ゐ入れけり
さて茶人作付られけるを。継次の由緒後あやかつくる誠
あそしみむ三とも定めれ。なかばでら様く出つれてその名
後立あれしかぬ子ばらしきなるを。利休らいそれ
損じてはよしやかなるべし。それ候物句付らるとそれ

筒井げじゆつに名し世に茶人となりて自宗をとなへあ
て殊にしたるよせきげんなるしく。是より高根千戸
をもて下ゝの心をよく成ぬ。又扱(?)風呂といふもの
旅宿して。茶湯(?)をする時さそくの宗(?)得して。仕出し
たるを今の竈のごとく。松(?)して此時利休。竹を切て。花生を
つくる（竹花入の始也一節の竹を三つに切て名(?)やじと名付たりとぞ）かくいろくのゑ(?)ども
茶(?)人は後(?)。して下に面(?)わ深(?)くもも人にも。ある(?)んせてゑ
しふ満(?)きて。おくのたとへ。膳立(?)の申(?)に而(?)あや。利休
もが器(?)と膳(?)みたるも後(?)は下(?)駄(?)に給(?)して。角頭巾をとうぶり



なる。木像を安置し。湯を(?)のゑつの三つは安置す。此
ちん代そのはらぐさにて。やともの(?)ひ。孫(?)正手(?)もにすの
時は。みのむとて千利休のふ(?)なる九條の末孫として天竺
る法ありとや。羅漢(?)の面影をかくあして何まへ
わらしとて。又近代探幽の永(?)らくらふ茶の
の茶入ハ。松ゐなむ。ゑとのとくせ茶家の物がもふると
その家よりてあつたる。ふ明暦の頃(?)人大忠の七川探
幽も新(?)あて多く(?)のたくさを焼(?)かへす。此茶家今
やけ行のさらきり出て。下部の面(?)かるは古今名(?)のさ(?)

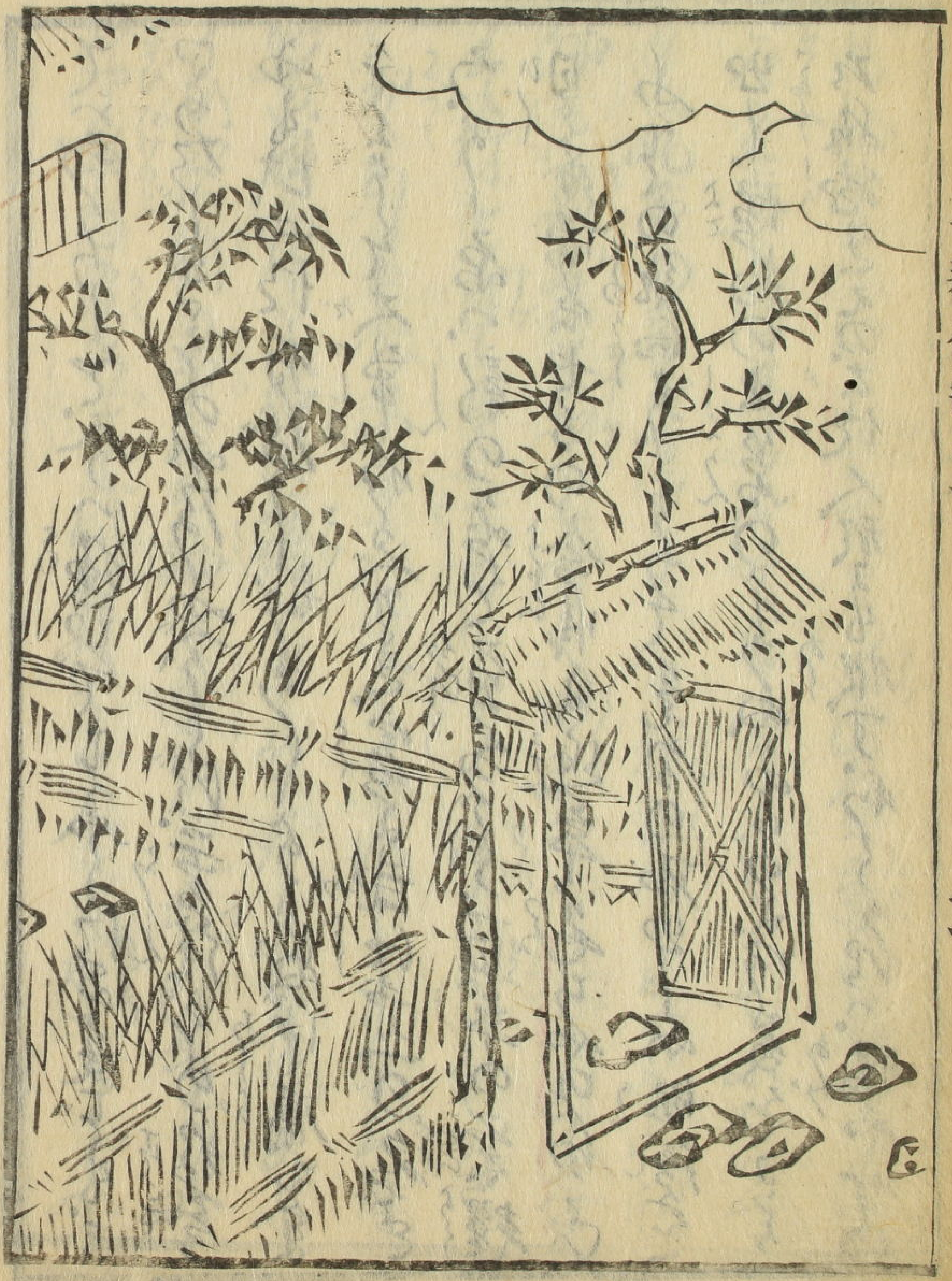
入りん高級へ上りける。画流しやのこのふへ。秘密しで
おしなふうのこの出るふて家の織し。宗家をとも
とゝろくよりて古の家への血統御きわめへ古今まで
御同そして探幽をみゆらなきえ。古今ふくしては金文
ふよびをとゞずけ芸術家へ無しくやと何卒御仁はおそ
えてのふ入ゆゑして相ひなきまで家千金となさ
き。家へ二たび家よ帰りやもへ改名して高く帰らく
号く。此御思善画てへ数がわうしで。探幽一世
一代ともじめて二ろの写生の画をとらしそて描く事ある

この御家の宝家と成まで。天下世に流布ある利
休の茶杓は大かた。小かた。なぐさみふは千金にも及ぶ
れどの。天下四方の箱よそくぬ。竹の蔵本でおそ
らく茶入は七ツ。世田なし。姫。あまそ川のたぐひ
又切れよんて字形。二重つる。古今様。あんらく。式ひハ大
肉切に。清水切に。淳路能物。定家どんす。遊戯どんす。
おぐみと多くまでごろよのく。ぐく古きを称ぶる
が肉にも。茶わん。などいふはしきもなし。織部
やきといふは古田織部。自分やきて用らまゐると今

も綿毛て必を負せより。先此方は直ちよりとけ
尽をとらし、一つ宛になりて。咽の中のしむぐりちに。おのづ
から乳気あまて清さましで。我要なりしやさまざまく利
体も象牙の茶杓を寄て。画楽ぐーかりの思ひ付
まて竹を曲て具りと角也。よく縺からみなくれてかざる
い卻あしくなるふまへせで。家具を持てさらふ巫付
所爰餅粟なる。糎の穢を干あきたると。咽喉のふ
つるひおい綱のされの抽つとろと糸きいれどもつみ。
竹のの皮あーども。此影ひりて全く求てつるな



ていあつりしを。今は此場にでこそやうにをさまじと
ゆあたどしきをよのふ内のべりしれ。当時世の數寄
中も此一個有の便しかるしよりぬ中庸をま
そるまて大筆好るべからき。言は武江才子の名ざと
うなし原は。影の名を前らすぐら。百年の栄耀
日あふ偽出せるの金情よ迎年。色ちやの中と
ふてとの気向もじまりて。是からの場出しに脈続を
出し。横稲の出皆のまぬみるかよ行な友そこころ
たれ徳まえの。古代人形すも非ずかくれ。揚や町の



豆腐(たうふ)をかうしハ風流(ふうりう)ハ二階づくりなる。続(つゞき)座ふのつ西の
細(ほそ)きふおちて。庭(には)ある毎ハ廊下(らうか)台(だい)の松の竹付。其迄
まで。他家(たけ)の為のみ乃上出(しゆつ)を。学びたまた一席(せき)で
そうらかハ支格子ほ来。冬そらの人くおくで並
大てひの家中の及ぶぬ所。見武家の在びハ粧矣をを
第一として妙む。ぞハ切ハ句編。時面の曽の中の所
の将合。雪の行角で居続(つゞけ)の独猿(どくや)ハ紀つ見の二階をもさ
いてある格の家をとうへ才(さ)に進のたのみ。そ席(せき)の奥(おく)の方へ帰ふ
ハ亭(てい)主の女房の出來ハおちふ白むく。家々もく。常付出いれ



紬ちやのちりめん羽織ハちやぢりめんまちハさや縫紋(ぬひもん)うる
ひら白川て黒襦子(じゆず)のやうなぬ所ふ。ふやくのちらし縫
立居ふちらしと人ままその仕立(したて)まもあうす。老より
ハこうそうふ。親(おや)のまへでもあげぬ手を。膝(ひざ)のよまえ届て
是ふ家の親ハ為ハちや宴ようる人もあるよまハ手をつめかう迄よしてそこおしほとう
ごうやハ。家ふれおかが。陪ようく連(つれ)のくく借へかる
す。亭主(たいて)の指図(さしづ)。おちのうひないハ口を関てそでうづ
くまる。亭女(ていぢよ)。妙まむうい。居ふどしてごくハ姓の
迄(とど)つきまて。其席(せき)ハけまぞざ半房。辛ふひのい

そのうちを塩梅宜しきものハ謎やかはよ手子のおさあり玉
むかしのむかしハ法案、夫より中立あつてきつての噺
しのもごうのたぐひハ、家ニ對しての妄念ある心、鼠の手爪
をなぞとかぞへ、㮈杓わつれる物、あつかふ方も
ありくと嘆ニ忍ニ、家の息ニ出でかハ手る師恵ろは
よの道へつうつたる。經書の手まし吉田兼好の筆の模ぬ
を、今吾へ行く、多ゟのそつそうまうの立ちまぐさを
ぞふほんとしたるのある投入。花生ハ、連理の作家
へえの掟あうて行をわける。ぬめずあるぞと、上座の



ゐんきいまずめに殺て鷺亭之のおりまへとゝくやさますず
とあんまり手をまぜ揺家ハ、けふに亞へ筆を付てぶ
らくず嗚むし太宰しひさすが接ひのうへ、ふきで趣は
ゑずきて能かんせちゞりやア来いの浦風の二くふ
むぐくと洞ふ三絲のうよのおやを亦す。まへて此里にハ
さんちやうの茶の名よりして茶よかけける女郎に
まぎれこみ入っての浮列まも此ちやのんではあま雑し

吉新談義二之巻終

# 古耕夜話巻之三

諧師自楽軒

今夕ハ余程冷気に甚し。残り少なき夜なりとも惜しき。
残しなり。名残かも情ふ草又ハ浦の葉かくれも。
ゆくも過ぎゆく。例の通りくの長語のやくと
習ひし情進退故も不省なや頃をも漏せうつし
吉備めかしく思ひまゐらせ。深き滋味なる
狂言のかんあへて連歌誹諧の持ち不及
なれし。其ゆらほし故。深し。ましき。睡気の

円かく。はんなる。澄りはきへば。かなしきく
霊く乃ほはさんつみ下松も。留るは。おかし
濁世ねがふも。師は紀の。あなたおくかゐる角を
承しば鶴鶴追しなやむ迷よぶる。乃ゑ表に
なさまし。ぬく捧ぐるゑ。諸きを見ん滋く席
とる。あんぜうのんがうほうありまなぞる

前庭　謡乃溫鶴傷相の狂言

随り　古今川系両親勤筆



擽術ゐ射御書數ハ。六藝と云て人の学ぶべき
道なり。古昔よりぞ。大内なく終ぐ尊ぶもまさ必
大平ゐ。千秋ゐ万朋陳称ぶハ。催陳帝称を
奏しけり。りくまる。音律正しき。あかりぞ政壊な
山門乃宗徒常の音声きえ。諸とりあさを。
神不能けり。されば文明八江口山姥小町称を。作ひ
ありけり。織田信長の早官ゐ。紹世織部常云。
けりる遊人なり。石の後ゐ大小鼓猿笛乃鳴あ
を。加へる称者扱りをまゐ。立称称とへて

奥州いたし。能登守有けり。大門百番ハ。信
織田が伝なりげるし或時。信長両で日かにしら
奥州ふするれの事どきる事をいひものりけり
や。答曰神なりと。奏せる故。神事をやしけり。今
さふらしまで。武門の家なきハ。敬て示さん故。
吉て申来とやけり。去るほ乃きるかく続ける原
出ぶやけるを。頼朝とおかひ深けれバいふさとの
織田も。常人ふハなりしまで。檜垣の頭世青へ丹精
祇。種ハ吉行ぶ。郷し出家ぶ。時ぶ治録を承る

さされば。今ふこそ御ふて。至極成る極より。露く
必て大切の御身ぞとなりけり。八月まふもこそれふ
ん紙用けも八幡ハ自なり。保昌大丈右衛監
出さし。いるしの为極。此ほふ幡ほ放けり。或時
葵乃上といふ。能ほ奥州なる時。はんかやの
面ほ。様難けるが。極ハお来なりる。系宝へ入く
たる面ほこお不。此の行て離きまで。あくりく親と
あがめて。此里給始ふこそ御ふて。此の身面と
いふて。此そく見して宝といふし。また文能の相伝

岩ハ。清かおろしく。又古風にて面白き遊世なり。
京浄瑠りと思へば。さもあらじ。是ハ浄瑠璃代の
義太夫て尾張の在所言葉なり。太夫節冠をかむり
ししるて。呼名ハおそれかとらふて。麓年月白むく。
其上下。主人もまだ家に。更に名を妙のつらなり。
此程言説勤る家ハ。佐々木派。又肉薄流とらて。
二つ家いらず。肉を繊流にて八代く程子。又八其家に
ても。浄ちるつ浄太夫とやが無理を知なり。宮家に
の浅ふ。京都四條の川原に。去月中旬の時分。



初延続。浅天八日なり。太夫ハ四階の如くも誂への
附御浄瑠りにて。浄太夫にも此の名人なり。剃大名を
二様言説相る初。此生名ハ。出でて大名とは分るハ。
万事桁かる公認あるかし。浄人をも小馨りや
京様をへ。大切の物。我ハ衣装延し。新しく上様かハ
風程浄見にかよふなる。孤生有其代程言に仕組
浄世の待ちふに。やらしけるものなり。浄ちまつハ太夫冠
出てなり。浄太夫ハ大名。其程言なかまて。太夫に
の浅浄なきバ。立帽子に大きん其袴。ちひさ刀

末広(すへひろ)扇(あつさ)をせうざかに。御掛(みかけ)て。面様あらはしく。
あつらへに。太郎冠者いかうなく。時分なれば。まいの
通。代おなになりて。少し御居やせん作(つくり)顔(かほ)して。扨く
殿様の。代わり家来(しょうらく)ハ。けつかうなり。うつくしひなる。
存(ぞんで)ぬのなく。若衆ふ有代候せ(さう)ほめけれバ
などいへば。あひかまへ。いつば。あいく。物まうして人
よろ殿様。そのまゝ。御下けるを。やめけるハ。烏帽子
若衆代。わさてくまけり。それ下ながら家様
の。代よながらまいて。又ゝ答(かつ)けるだ。それをあつ

此時も。後の為も。思ひまはるとて。悪しけるが。後には
先の事は(あつ)かゞみなりて。あらくさむ由なりけるぞ
有(う)様をかめぬ。自然わき見しけるを。夫婦の異字
若衆時に。本人(あるじ)左群集(ぐんじゅ)して。異様なるをり。
あげまく(おて)の人は。感(えん)しあるより。あそくかいての名
人ことてあひがらり強さ。勤めり。此時(さうさく)の今の御太夫
ありぬて。語る所今の様の町中村勘三郎。せん役者。
きるまで勤をりよて。慶(けい)安(あう)の比ハ湯御前乃
[illegible]様座敷かで。五ん本遊様(りき)[illegible](あまたかい)[illegible]

勤し也ぞ。甚だ古しやけり。む猿の面桝(めんかけ)であよく。
さるによりてさるまるといひけるにハ。ゆかしきぞうめ候ども。
其ときも昔(あつ)の猿楽の演ゆかぐり。江戸の万歳(ざい)極とで。
鳥打きる也。能の申楽の。申猿亦君て。亦申は
いにしへぞ。其もの勤也にさる其のやをあらはし
延壽(えんじゅ)寛永年中。初て今の猿まはし。雨露して
雨天にも勤めけるは。灘(うんせう)鶴ハ猿めこそハ。お国
極とい。帝王也。もの也。猿世にいあり。今八世
の中いかりて。猿起(おうちゃう)こりて千歳もあるべき今めの。

湯屋もいつ。百年もむかしハ。男女入湯しけるく。
きぬ時女。男子ありし。女形といふへく。男子なく勧
めり。今ハ法ある所の(のぞく)緒で。桐大臣といふて。まねぶ
て勧めり。因ぶ法師といふ物ハ。四百年以前よりある。
むかし除る時乃比ハ。将軍家(ゆうかん)永の。遊具の一ツとなり。
今乃錦ふ初る。猿の面を掛(かけ)まよさふいひし。頭ハ
あやくまゆかかりけり。立浄けり。かるさん猿ままさ猿
猿浴ぐ。武ハ一二尺もある。木のよくまえん申め。
猿猴のせ。さるよく(いうく)遊くの。熱(つ)涌上げる。今の

かる轍(てざく)のくひ。是ハ唐土(もろこし)なり。又坂あやうきへすの。修行。百尺の竿頭(かんとう)一歩を進む。いふハ是なりん。又獅子奮迅(ふんじん)。日数なり。唯獅子の頭(かしら)成らもる事なり。加うる語ハ。今の和(しか)云金輪(こんりん)切。車語ハ車輪のりて。従来なるにハなかし。車の輪うけるやうに乗くへ出て。食(じき)かたも也つなり。古昔もやのくひハ。皆繋(けい)成切。是を本人にまきれなる。出へなり。迎非人まで。勢成切しし。古例なる也。又尾道に当る。杯より。万器をいふ

あり。正月の比成て。冠にて装束(さうぞく)改る。是も大江の家行政盛下へ進み旅けるゝ也。ついちに。感(かん)じて。千里までも来り。万世の後迄弁しより。初て給ひける。極月初旬より。非人ども大(おほ)きさあまたの笠に。紙にて。まひうたふ。是を家々に配り候。切付紙を掛し。来へあるき。さまざまのいふ事に。囃(はやし)立ていふ文句の内に。声を舞楽(ぶがく)といふ事あり。古風なり。是もおし古実もなり。上古大内にて。極月にいふて。晦日(つごもり)の夜に追儺(ついな)煤掃(すすはき)あり。今其の古儀の

卑賤あるいは紙かむり。常陸の上ふハ。あくしき。秣
布へ。冠づくし。乗馬粗行あり。急ぐせきもの紙
捨て。取そり。さるまひて。いとま井けると。京女房あつま。囃す。
むかし寄ふ正月のさぐりねもかし節てさらふ文句あり。
末紙むかつるんあり。夫の様子ハ。其身多し。詳中ふ
譯ふハ分しや此様も。さぞかし我孫も。常遊ぶふ。
思ひ付て。せん今勝ハ。心もぞうりか。法やなしそて
けんえん其至誠。まかひへ。押たおし。後の義述たる
入。御覧くださし　けれ

## 修辞　誹諧の濫觴并古實

### 附り　近代宗匠の事

誹諧ハ。歌の餘風にて。今風雅の道となれり。
此俳諧の一體。ひろけひとりふて。滑稽ふらふ。おかしき
けなり。俳などハ。種々の奇の転ろ。物なり。其濫觴
ハ。宗祇御の奇ふ数寄代連歌遊ふ
て。俳しより。様々あり。或ハ上古ふ。
俳諧の奇ありといへど。さまざまありて。頑下の

人柄ハ。市井ニハ。宮口語なりて。綿ぬかるし。都鄙ニあらば。則る人ニ。なりて。よく滑稽文誹諧て。俳諧も楽みものなれば。俳諧のりても。詠人に而りてあきれハ。労して。功なきいかなり。俳諧も誹諧なれども。よく習得ほどさるが。素人ヘ熟芸なれば。志あるべし。俳諧歳旦歳暮。月次追善追加賀の。祝儀。さまの四時。風景ニ真ニ乗して。発句柄ハ。けかる。風雅なる。又風流なるべし。是人の情用ニ動ける時ハ。詩ニ奇。今詩音ニ等やさ

人ハ誹諧あり。さればは。柳多留ニハ。三十韻五十韻。又ハ百韻もあり。俳諧附時行。歌仙発句の。或ハ宗祇が丹て入るのそめるのと。いよいよあり。ゆしきすこそ。恐し。頃やしなる人ハ。狐白裘など。諸のこととりて。時々古るめ内ニてん申ばかさつに。悪むは。ば花葉ニ引付く。さしこ白ば。よき宗祇が丹て。はめるすよなてよ所なり。あらし。今世るの宗匠からのて。人の営み美しきなしんらニ多くハ。そも出てん仏代て

より不験者をいましめし。人の子たり。もの。ある人
がてあり。是にハ本。末あるの。遊ふて。かくハ。おち
殊さしや。高くなりたるに。皆名字。綿密にて。おさ身
を紙子の側にして。今ハ手柄子。偏ひてやく。中くらふ
なり。腕ハ出て。細音の方へ。行てげすち家中道に。な
まなし。信も。今柄も。入るこそなさば。自分ふ
あまくも。なりかくし。おしこゝふ万句なる。夜身に
いたしける。浮世語なりし首の家なふお遠して。
おくれへせうの。大鏡口なぞいふてや。入けれバ

流石いなるも。いまだ。むかしのやうに。押つけ。やらく
首尾して。家道中なるとなり。是もござやうさんなり。
はい名も作け。是おの親。ちと家業様にて。
嫁も。かゝんがせうも。なんとろうも。えつぞ。又十
遣ひても。おし。何結ふても。おし。御手の切成るも遂
し人の。なくなる野狼かも。おし。なかし。異風なり。
なりきなり。ちと内ふハ。ぜひくく銭のやうなるものを
首ふかけ。日本之柄袋なるもなり。つくくまゆじくる。
杖をつき。又わりがくて。なを晴天にも。たたき。

毎日深あつまりて。町々は細繝し。昔々の名
ある人。又ハ法をもちひ。家近の家に彩色佳筆
茶寮格の法式。遊びし。古跡名所に碑の。
異日。をかし古寺。古寶等迄。熟覧して。
奇んな我かして。清し夜分自物にて。風雅の貴
髄に入りつるる。しかし。唯ものあしからてあり
形平生。假けあつふ化ものにせし。謂人六十六部が
の。千住有りし生成。なぞ中川つ行ても六郷の
川もかまうまで。年中。六十六度溜し。計算

ちるに就るし。是皆嘉齢に瀟灑平なるかしらぞ。
古京にて。色茶遊戯みな茶の事。又上品なりに
瀟灑を。ほこるめくをふす。さてそくあつかるさき。
人く必々時興。是は生ん車の倒なえて。後車の。
楊弓小やあつて今思ふに古昔の名ある方の。
此ほかに達人もいきまし古の鶯乃気合は。
いかんで。面白く意味ありて。情も深し。かりそめにも。
いやしき。ちかひもなし。誠に悉師ものんぞる雅
とは。紛りかはし。佳人のそれに盛意れば。文字

そも。おもふしいんとあれハ。天地一躰の。人ミな
まバ。人の身に。鬼神もなし。故に人為家にもまバ。
神佛も随行。又感應もあり。是本の。作理になく。
老々く。まかりそめならず。家道といふ。楽備。つ
かりは。おもしろ趣もあるべし。道といふ詩ハ。ちやうの奇
物にて。やさば。奇なる識あり。いふにまぶ人のもとて
あそびありとて。おーハ古筆古實の名家古跡
の懐も知りて。よかりなむ。むこ鳥こ本の口伝訣ハ
たむけ出たむけ草筆等の口決あることて。各別



なり。おし発句物あしし。ん成用る人〱ハ。初ち道に
あくても。野中の清水。あさまのうち血あち物の物
冨士の煙を。形山千里の名物ハ。まこと思あり中そこそ。
古実あり。あはさる家道ハ。あるべきかは。是併せてひかに。
名和人名乗し。俳諧時ハ。身分切ある地口流に。
そうで。能よくいふ叶ひ。ますへの筆にへ。振みに試
名人とかぞへけり。縫ハ是ハ寄の鄙人ハ。本意に
せぞ。おもし発句物ハ。精愛文原字意味深長とて。
よかりん。さてまば風雅物ハ。別てまうなきあふりて

須しハ。ことに別に意味ありて。毎々流にあそし。故に
吉の名なり。郷人達ハ。行御して。法の御遊ありし
眼のゆゑり。近所に古跡ある。翁。跡ある事志るべし。
聞こゆるかりし時。卿の云へるにて。法の御順なんせ
に申すに。宝の八景にいはれしに。寄りて名所なりし之
つの八景なるにても。宝の八景に之。螺の縁
し。かたの景に於きば。さらに志りて。是にも
ゆゑんで思ひて。里人ども業門いふて。さそひて
見なりに。ツヅき八景といひ。ほうもあり。里人ども

さして。越けるハ是まで。此方にて。猿掛峯や桜の
更科に冠山ハあつらひしにむとて。小塚畾くとして
八つ許り。由く螺ある。濃ましてけ。おもしろつづら来
望しよりハ。えてさめて。面白うまで。是浅浅の字
さらしなの郡姨捨山の。むかしの名ハ。なりしかなるさ
月の名所なるべ。旅行るまで。おぼろく。体しく。添し
ふいかき毎月の比。宮にまて。月は流めべさで面白
らん。あの本城山の岸より。月のおしき。添せば
さぞあはれしく。是にあらむ。唐土の洞庭の秋

乃月。江州石山の名月湖水にかけ移しけるをかいは
いかではさらん。思ひは至らざらん。しかも夜の詠なり
素語りの謝人の名残りとて。我かたせける。ちかきに
焼拾ハ是でも夜の心を好むもの多く
そは行れども。諸人の事なきバ。心に添はせ堂ぞ
されど月の夜なれて。詠めば面白やらむやと。深く感じ
いなせし。情話ふもてけり。是あれば寝るにやしようらて
みな別なり。さるをバ書籍にてんぼにてやしよう。
おのくハ自行で冬ふハあらど。講師ハ閉ふ入て休息を



# 古耕夜話巻之四

講師　自楽軒

今晩ハ講談乃始にて正体なき多様々の聞ゆらん
ふ何か面白おく慰ふも稍咸けり中へも趣向と
思ひ付こりさりかく当時たりける浄瑠璃義太
豊後節乃法生人諸ふ婦女子の口ともに流し
まちる又当時は怪画読代当世人あるる人と
なるし是も虚説ふ似實録もありし今宵ハその
新代随一通まそる招かてやよまるくハ仮名深

從来書の内より夜話注釈仕候例
に倣ひて新板物編集いたし候を例の題は
風俗遊談集とやて浮境の義乃極來一つに
重則ては諸事遊女乃容義並郷夷人異形
乃酒盛是は別て笑草ならん物なれはこ
の媒ともなるべし必求て御覧下されかし
書乃浮世

前座

題り

古今浄瑠璃乃濫觴

豊後節善悪両道のかた

浄瑠璃操乃濫觴。唐土にて人形を傀儡と云。
いにしへはおやまかし。仕けるものなり。中昔は代々
近年太夫節始りて是を乃浄瑠璃なり。近年八
義太夫節。時花なり世語なりけるがよく人の
情を。天谷喉迄。に義善悪乃思ひ入虚説などはいまだ
勧善懲悪の其訳とかなり。又文字豊後節
然るに三味線にて時行る。其文弥節余韻ありて
それを好しく。然るに今浮世の女子婚姻に
婚礼に又人の悪の媒といひて。然るに後人多し。

彼方にて鄭衛(ていゑい)乃聲(こゑ)出て。是等(これら)禁(いましめ)の一へハ惑(まどひ)しも
ことありけり。去ぬる世豊後節 抔(など)いふぞ惑(わく)して
時花(はやり)奇(うき)も二双(ぜい)情(じやう)も盛(さかり)て親(しのぶ)の目(めくばせ)にまぎれて浮(うき)名を
のぶり。豊後節ハかし心中(つひえ)に理窟(りくつ)をつけ。道(の)へ行
かるゝね。意所乃義理にをさめり。情(とし)き命を捨(すて)る也
人の能(ちよ)気等を洗(あらひ)しが。情き命をも。恩をさに捨て。情とふ
あはれにいひをもしむこそ。情けを。その命を動
其(え)の程に捨ありし。日本一の君臣をもいひまし。
是めんとかしにたりて。するにもあらぞ。世川とおふも

無し。然して捨(すて)る子にかゝる捨(すて)る子をさなき子
にハ捨(すつ)る昔のならひさへあり。無く成子今猶(なほ)ハ
はれて大切なりぬ。然るによりてハ命をも捨る。さるは
唐土(もろこし)の書(ちよ)なり千金の子ハ市に死せずといひまししく。
かなとめ。室は己が好の事にハむしやうにまよひまどふ。
神をへ義理にハかまはず。是によりて家(いへ)を亡し身を。
失ふもさのみ多し。又豊後ぶしにて。世に好妓婦を
勧(すゝめ)ぬるハ悪事。むさことといふべし。然るを是も豊後節
にて妓記になりのかれたるもの多し。然して商(とうじ)はれへ

まゝ婦女子たちに恩智恵の添ふなり。昔は二七十四にて
初て女ハ髪あげといへりしかまゝりおかにハ。交合の情
をさへ経ずあるに。近年ハまや。十歳を越ずして情欲
動て交合の心閃に萌きざんとやしハなかの薮別も
あらざる。女子も家に閃より操節なる者之儀令家
居の倒きしに。誠とし。自然と閃より操を失れの羅にハ
あらび或ハ世る悪習に染し人根いて道にハ。婦女子
手は手習や物書せしむ。又源氏物語。閨ハ
百人一首抔をいふもものといひもきし。又もあらし



久しからず遠ひなり。物書き又儒子ハ天下事への
家なりといへるう。誰かもてざる人なし。格式の大切なる
教誡悪しといふにハ。定て害ある不物書か己ん出文字を
参据行されハ婬乱の智恵をも付ることなり。方ハさぞ
思べし。又源氏いせ物語百人一首抔よりハ。悪ろ者おかし
猥ら見に上ぬりといふ事なるべし。是非の謹ハふかく
風流にて文字活て志ろうて婬き様子もいうべき。ちと学
容ざしたしなこる志てなこる悪縁もかくぞ。親
乃ゆるさぬ恋あるハ。よきとハいふまじ。さて後と

もかも書ぞ。又績もせず女子は身もたしなまず
ハ綺ぞ男を白紙なきとよ気とりふ男ある
男女も立派もいう。是も父母乃めゆるさぬは
いかん又神武代さふ女子ハさだした男れの角
みとさへかもし八如意なくしたかありをあるぞ。然ふ八
角の男りふ結がよへといふて。真木なるや閨のかの
松葉おもむをふ契とし。なそかてん紙など事縁
ふて流せる奇ふてんぬ代男有りけしなく八。何ぞ勝劣
いふや。然く思ふ男ふ有へ。又中人以下別て此段のふ奇



婦娼媒の称ニ於教てよきさ由なり。是ハ松葉いへ
て。男女くさくいかの由なり。をもれふ事なる申へかり。色角女
子好み道もある可京和とて。ほうなまめかしく。その
辞ふけれくと利居いふす。おく〳〵おもしろふまへ
或ハ言葉もかなく〳〵ましてるも峠くから〳〵。又緒銭
かおし遊とも。身体相みもあてふくりてハ格段も
よくおかりぞかの嫁入してまは家の。おもへ役ふ言
町人杯ハ格とくそ贅別。各格さへ字変ふ綿文
ふ對して敬ありさまふ配として柔和ハいのふ

〇かゝるを何程いふても。心に浚（さらへ）を唯好むことなり。
ことにまでのその（おっと）つぎ。稽古（けいこ）して指（さし）南まで別（べつ）して
聴（つむ）へ。是ぞ綿蛮（めんばんすゞめ）鶯（?）で鳴時造といふて。事一様（やう）く
詩経（しきやう）の中にも見を把鶏（ひんけい）の歌（うた）にあるは常婦の情（なさけ）とて
いふて嫌（いやみ）なきなり。又中人以上の婦といふとも。
琴三絃などよし。是も家（や）の娘になるなり。或は中産
浄瑠璃もあるまじ。仮令謡（うたひ）などなりとも文句（もんく）節（ふし）
相（あい）ならぬは。琴三絃のものの稽古につけて面（おも）
白（しろ）からず。又子供などにては。親はいまだ和



なり。和らかなるを好む故。父子兄弟も和せざる家（いゑがら）の
乃ち遠（ゑん）ざかり。此の理に閑（かうき）人は唯上つ方の娘子
方ハ。小音浄瑠璃ハいやしといふて。うちに稽古（まてまする）をも
是又心得違なり。我等時の。下稽古にてよき。仮令
又八節目なしてる絵（ゑ）る家にもの好る人。またに
随分器用と思ふ方も。多くは家事も成方の御つとめ立
ところに乃女紅義の女功女芸（ぢよかうぢよげい）といひ粗かなるを
もなし。皆よき嫁（よめ）となりて後も幼少（ようせう）の時より稽古
女子の藝（げい）縫（ぬひ）針（はり）は更にして。ぶ浄瑠璃

瑞巌も宗として其や佛ニおし貮ハ寮入道の
御目みへける者の猶ニ云しハ是かのけつらうあら
和と云ふ者なりきより。後掛後ニハ志を重為を見
後さくるて和ニあらそを容貌又ハ言葉様ニて
後ニて後はさーかる時ど。一度ハ天子ニおしとんニて
人の孫乃深衣ある光国門のときニて。一る濁御
すんと。極席を交後ニ東山の看侯儲けるとひ
窮ている君や其の徒も出継生ぬより云を飾も。
奥ニ有。又ハお姿やうと為きうせ。是ニ然



氏なくして玉學の又ハ一生ニ及ねかうそん代
猶の内説ニては治祖又格学しの人代かる時ハ。
物へ言猶ハ始なり。教て後さは猶く猿ニ有済務
理なり。是もち代の絶義太夫ハいしざる故河東
ま太夫らん人は稀なし。常にも紋を極乃経は
豊後節ニ極し。是代世らの云ひくゞさニ絃も
三年前は大成功をとるといふハ。けるすあり。是弟
男子ハ宝なり然今。猶ニ若ニおしても。主人自見之
ふいちけきハ。何ぞ添し藝もなりやと。為けきは。

さればやうなはいてさねど。おかしい事もさみせんも
なりものもなし。云けるハなんにも此方にても藝者と称る
者にてハ。氣ふけは。本来のせつ。月琴のあそさを
さわひ擬ふこは絃令なり。それにおかへ後代にいる。客琴
其外も誤りある。是ふかりてある時ハいうべき事も
あらぬ。常子つけ法。又大平の楽の。式藝をつく
すものた。あそふハ各別。往昔往迹の古みちに立
尚情男女にうとし。琵琶無弦管絃大小鼓琴
ふ流行の奇浄瑠璃。中にも早小歌ふ至ては殺伐声色是

こそ今の世道なり。何事も一利あるふはいらぬ是も
不益不無なり。唯情守るべきハ餘面白けるハ流
あさ。故ふ孔子も不乃用ハ猶戒るとハいへし。流さに
戒禁なるなり。清貪戒めし。天命を知ふ
いそして富貴を求るハ我に於て浮雲のごとし
とのふて。仕進又渇て盗泉の飲をいまんとあり。
ければこそ丈夫乃主弟子ハ日を同して豈縁へうべき唯
情守るべきは。婦人女子ハ嫉妬なり。是ハ已が愛せず絶不
縁事を恐るなりゆゑて悲しみあし

蝮蛇

情弱化生蛇妾の事

附り 名護屋軍次智謀

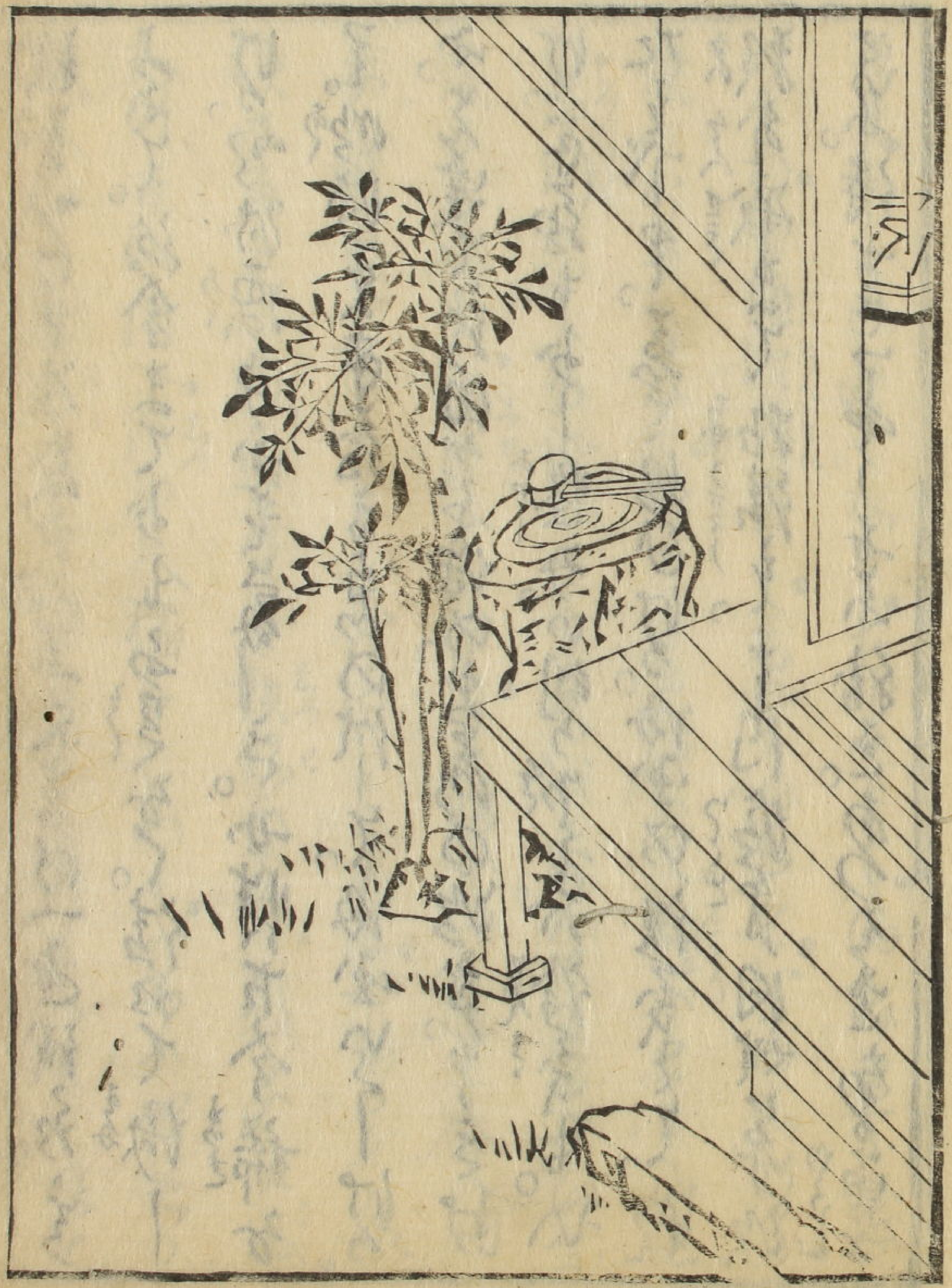
昔情弱姫君に名護屋軍次といふ勇士あり。其妻ハ女にて早世よりおて。然るの侍女が母の侍児に抱らこ容貌清こて艶なるやうなありし。ますこ琴三弦杯あり。しつしぞ軍次も年頃に深く契りし者あれば。寝やもさびしきまゝに勿にて彼仕女と枕席を共にせんとは思へども。母の心ならぬも思ひふかくて過しけるに。母も流石老衰けるゆへ我が子の寝やの淋しさを察し見りて。或時軍次にいひけるハ。そなたも年たけ。今ハ妻を迎へて家をもたすけよかし。幸ひ我が召つかふ彼の侍女はなくてハならぬもの。心よりなかれバ。表向こそ名別なれ。内証ハ妾にもせよかしと。かの女にも時々いひふくめ。今は軍次も妾も主従にてあらし。終に関係の睦ましくなりける。元より年頃にて男子ふはなし。女は遊芸を見より表向は名別内證にては夫婦とかはらず。然して後へて母も。

浙海か里けるが。程く卯の人の容(かたち)かくば。浜之肴を絶(ぜつ)
して。常(つね)に百任の女子近隣(きんりん)さへ寄りそひ
侍児津屋々仕居仕の女子十人に及びける。中に
国に夫人京都西陣(にしぢん)より抱(かかへ)しものなり。名は錦田(にしきだ)
といひて。形容(なりかたち)も勝(すぐ)れしが。武将の寵側(そば)に勤
め居(をりふし)手業(てわざ)の出来しぞ。彼(かの)女は停びしより手代(?)に
錦田むさしにて居たる處。其御が手にふれきは見ゆ。
[illegible]にふかく手にも身しめ錦田が部(へや)に。
振(ふり)かけ有ぞ。見人(ぶんな)らさん。何なるかたと[illegible]

障子のすきまより彼(かの)妾窺ひ居て。忽嫉妬(しつと)乃
心おこりて見より何か知らねど。坊くずれしを見。おそ
ろしげなれども。妻は[illegible]ては。おもはゆさに。むかしの事を
知らず。てハ錦田が身の上にあり。其上の有様を見れば
[illegible]らば。おも自(みづか)ら心なくて身(み)に[illegible]
アせ(?)。さりげなく。いかにも是を見ては。女心
の形(かたち)を[illegible]し。身ハいとしげにも。外面如菩薩(?)
内心夜叉(やしや)のごとし。ともかくも。[illegible]へて。まず此
妾の後にて。江府(えど)へ趣(おもむ)ける。留守(るす)に[illegible]妾侍

猫はかくと怒りて。ついに。野田が座敷に。
忍び入て。締殺て。その死がいに。石を結付け。井
の内へ沈め。又鎮めさせけり。猫は病して
是をば。浪人の内へ。盗て井の内に沈させけり。
其後乃。下女まで理立難。井乃内にありし。猫死
してありけるを。見付て。右の趣を。主妻に告げ
に。そんな此井を。探るとて。下部に。いひ付て。
埋させけり。其後一ヶ月過ぎて。野田何とも
なく。兎角病みつきて。いひかけし。浪人は

仰付て。野田が密夫せしかば。つゐに。出奔
いたしける。後文の由三日の内。急度尋ね出せと。
ありしに。浪人も数日は隠て居けるが。終に尋
ね出されて。宿中にて。惣角浪人も。此所にて自害せし。
御検分ありて上下とも。此悪事に加わりし。頭
けるへの事ありて曰く此者が家のおきてを
は法に任せ給ひ宜なるべしとありける。其後
猫の祟に及びて。あやしく嫁しける。此家も大方
年々かくれて。おのおのいひしこそ。此方へかへしも



讒言かけやうなどいふ文言の一通残れり。され
ばこそ。今日までおもふことなく。結れて懺悔し
ける。かの悪念をかくさぬ事。女性は古今稀なる
事。此悪事ま露顕の後にて。海中にいりける
に。其後新田が子孫の一家の怨事やさけ
けり。其霊もなし怪しみいゝりけるが珍奇も。い
たきべし。悪て思ひける海中の亡霊として。新
邪が戯まで指揮をこまり内々御事同姓等を
といふ侍士さて無事に。あつきまとある曽士

あり。其日の暮くだし。ちいつとて酒肴を並べ
けるに。重極沈酔して。宅つもゆらを一同にけるに
夜ふけにおよんで。弥もさかえけるや。頻りにさけ
へ縁側へおいて。予術にて。残香いまるかに白
二八斗の婦人。忽然と現れ。窓に向て声して曰
妾ハ此家の娘に生れ。新田を夫とやまた。世にあるかに及
抉此家の内。奥々の嫉妬により。殺され流
あめ井の内へ沈めや。又猫をとらし。一所に埋め
ま今に妾猶の霊帰りて迷ひめぐり恨を

清さんと思へとも、亭主人気へ、力になりとそ今になく
迷ひ出けるが、夜様へ立帰り、世話をとらせけるを、なく
に出家なりける。早次ハいまゝいつさに思ひ、ここに縁者
亜ひありける。夫より四五日過て、伊勢路にて行違ふ
所あしき、高野籠の頃、謝礼に少し。扨又今夕も流
るゝさまなる、亭主来りしとや入けれハ、宇兵衛網
知して、兄弟早次方へ趣く。けれハ、早次も出て語し
とゝまりし。其あいだ相談して、まゝく、難あ人まて帰ける。
打頼みのもてなし、早次縁往の人々を追退け



亭主か年頃して、かけりける。亭主弥も縁田か
尤亡霊の慰みに、形して殺せしの所、守り方、怒を
何とて逆らひ、妻とも、亭主おかしきさんく立寄て早次
あいしと押よら清き妻を殺さハ、去りし世も身に掛りて
いかゝん、詞にいふも口惜しきもん、色角ある残念に復
世話へ見えるも、切りし、路方へまゐりに、次へと聞けれハ、
亭主も驚き、領掌して、其夜ハ帰りぬ。二三日過ぎ
早次宿所へ行て、主人対談の上、妻を
呼出し、亭主申けるハ、縁家の為にて、其方に眼をは

もあり。今宵中に此家をおへしとや。彼是を爰に出す可き銭金で離別ハ非ぞ何にて来る云。彼是がはの如き身の上ほどかげしハ事次答曰く、武士も思ひて直に承知いたし。前方ハ急に我に逆つきたり。窃ぞ身ひやうへとて彼後にて候けるに従ひ夏の哀耳縁にきてそ上新田が罪もなきしけるハ其方金を返しけるよし。思ひ之事次新田が幽霊に来らずして於いて某一へ漸く我が怪しといふ事にいふならし。信じ難し。丈人又腹の内一勝

にてしてか言ふ奇なりし故に況や今死にての事の天行に依きバ何ぞ故に持てる言葉に哉き也や兼ねる事に若事必ず各法の手術より言ふ承知せん計略に巳かちもういひ多くなりし猶と殺し一両に埋めり。悪しきに事法にて其旨をなす人の事なきバ誇りて諍ひ成るも事に遠慮せバとて捜査も混ひ込みかより何ぞんに及びていかる事業のいふふに及ばず我が身のうへも難事に経て新田が幽霊ハ不可なり世の事の悪しき事に依て何かいひやうも我が一分乃親しきにて双方より添ける誠に古今独歩の

寶暦五丙亥歳初春吉日

東都 日本橋室町三丁目 伏見屋善六